

(二〇二三年度一般選抜 A)

国語問題 (六〇分)

(この問題冊子は表紙を除き十二ページである。)

受験についての注意

- 一、 監督の指示があるまで、問題を開いてはならない。
- 二、 携帯電話・スマートフォンの電源は切ること。
- 三、 時計に組み込まれたアラーム機能、計算機能、辞書機能などを使用してはならない。
- 四、 試験開始前に、監督からが指示があったら、解答用紙の受験番号欄の番号が自分の受験番号かどうかを確認し、氏名を記入すること。
- 五、 解答用紙は三枚ある。解答は解答欄に記入し、その他の部分には何も書いてはならない。
- 六、 監督から試験開始の合図があったら、この問題の冊子が、右に記したページ数通りそろっているかどうか確かめること。
- 七、 筆記具は、H、F、HBの黒鉛筆またはシャープペンシルに限る。万年筆やボールペンなどを使用してはならない。訂正する場合は、消しゴムで丁寧に消すこと。消しすぎはきれいに取り除くこと。
- 八、 解答用紙を折り曲げたり、破ったりしてはならない。
- 九、 試験時間中に退場してはならない。
- 十、 問題冊子と解答用紙を持ち帰ってはならない。

以下の文章を読み、設問に答えなさい。

世界保健機関 (WHO) によると、世界の人口の約 5 % は聴覚障がい者である。聴覚障がい者の聴こえる程度には大きな幅があり、全くあるいはほとんど聴こえない人々を「ろう」(注1)、それ以外の人を「難聴者」と言う。聴覚障がいの原因には、先天的なもの以外にも病气や加齢など様々なものがあるが、先天的か後天的かの違いや聴力を失った時期の違いによって、その人の友人付き合いや仕事上のコミュニケーションのとり方に大きな違いが出ることは容易に想像できる。(あ)、ろうと接点がある人はわずかであり、聴こえる人々(聴者)(注2)の多くはろうの人々について詳しく知る機会がほとんどない。そのため、ろうの人々がどんな風に教育を受けているのか、ろうの人の家族との会話や(1)団欒がどのように行われているか、イメージすることさえ困難を伴うのではないだろうか。

今から 15 年位前にカナダのジム・カミンスというバイリンガリズムで著名な学者が、ろうの言語発達とバイリンガルろう教育についての講演を東京で行った。講演は日本語と手話の同時通訳付きで行われ、数百人の来場者があった。筆者にとって、多くのろうの人々と同じ空間にいる初めての経験であった。その時最初に感じたのは静けさだった。より正確に言えば、話し声とか人の声のざわつきがないことだった。会場には確かに大勢の人がいるのに静まり返っているのである。最初は行儀の良い聴衆なのかと思ったが、参加者に占めるろうの人々の割合が高かったために、話し声が少なかったのだと、すぐに気づいた。講演が終わった瞬間、会場中の人々が両手を高くあげ掌をひらひら動かす光景が目に入った。静かに紙吹雪が(ア)まっっているような光景だった。聴こえる人々の(2)喝采が拍手(音)であるのに対し、聴こえない人々はひらひらする手の動きで感動の度合いを伝えるということを知り、なるほどと思ったものだ。

(い)、ろうの両親の元にも聴こえる子どもは生まれるし、聴こえる両親の元にもろうの子どもは生まれる。前者の子どもを、Children of Deaf Adults (ろうの親から生まれた子どもたちの意)を略して CODA (CODA と呼ぶ。昨年「CODA あいのうた」という映画がアカデミ

一賞を三部門受賞したのをご存知だろうか。映画は、両親と兄がろうの家庭に生まれた聴者の主人公と家族が織りなす生活やそれぞれの家族の間の心の(3)葛藤を描いたものだ。家族のコミュニケーションに使われる家庭言語は手話なので、主人公の女性は手話と音声英語のバイリンガルであった。ろうの家族を支える高校生の主人公が、日々聴こえる世界と家庭とを行き来しながら自分の将来を模索する。ろうの親の価値観や実際の苦労を垣間見ることができ、コーダの生活が少しではあるがわかったように思った。

さて、もしこの映画のようにあなたの両親が、完全なろう者だったら、あなたは生まれた時から、音声言語で声をかけてあやしてもらったり、子守唄を歌ってもらうことはなかったはずだ。生まれたばかりの赤ちゃんは、目ははっきり見えていないが、(4)嗅覚は発達していて母親の匂いを嗅ぎ分けられると聞いたことがある。聴力は生まれた時からあるらしいが、あなたがコーダだったら、最初に接触する言語は聴親の場合の音声言語ではなく手話であり、手話を言語として認知するようになるはずだ。つまり、コーダは日本手話と音声言語のバイリンガルとして育つ可能性が高い。もともと、保護者の聴力や方針によって、コーダに対して手話を用いるかどうかはまちまちらしいから、必ずしも日本手話と音声言語のバイリンガルになるとは言い切れない。また、音声言語の方は、家族以外の人々との接触によって習得していくことになる。

(う)、全員がろうの家族もちろん存在するが、これはデフファミリー(Deaf Family)と呼ばれる。ろうの子どものうち、聴こえない親の元に生まれるのは、10人に1人しかおらず、ろうの子どもの90%は聴こえる親の元に生まれる。もしあなたが、ろうの子どもを授かったらどのように子どもとコミュニケーションをとるかを考えてみてほしい。あなたが子どもの名前を呼んだり、子守唄を歌っても子どもには聴こえない。もちろん、子どもは生まれてすぐに話し出すわけではないが、生後まもなく周りの大人から言語による(イ)しげきを受け続ける。赤ちゃんは生後2ヶ月頃から、「うー」や「あー」といった泣き声以外の音を出すようになる。そして、6〜9ヶ月頃から、喃語と言われる「ばばば」「ままま」といった音声を発するようになる。まだ言語としての構造は持っていないが、大人とのコミュニケーションの一つ

の方法であるばかりではなく、言語音を区別するために必要な調音（ウ）きかん（舌や口、声帯）の使い方を学んでいるのである。一歳頃から「わんわん」といった意味を持った単語を発話し始め、1歳半〜2歳頃になると「わんわん いる」といった2つの語からなる二語文を発するようにと言われている。こうして、赤ちゃんは乳幼児期に認知活動の基礎となる言語を習得しているわけであるが、もしあなたの赤ちゃんが聴こえない子どもだったら、どうやって子どもとのコミュニケーションをとるだろうか。

人が最初に覚える言葉を「母語 (mother tongue)」という。日本ではしばしば「母国語」という言葉が用いられるが、母国語という言葉には国籍を有する人が所属している国の言語という含意があり、現代社会のように人が国を超えて移動する社会の実態にはそぐわないため、言語学では「母語」という言葉を使用する。では、「母語」とは何かというと単純なようで案外定義することが難しいが、一般的には、親、あるいは育ててくれた人から教わった言葉で、最初に覚えた言葉ということになる。

しかし、一つの国内で育っても、複数の言語に触れながら生活する人々が世界には多く存在する。例えば、台湾の人々は家庭では台湾語を話す学校や職場では中国語（北京語）を用いるし、フィリピンの人なども家庭ではタガログ語やビザヤ語を使うが学校では英語を使用する。インドの人なども家ではヒンディー語、学校では英語というようにアジアの国々だけをとってみても多様である。（一）そのような多言語社会に暮らす人々にとって、言語能力は年齢や生活とともに変化し、受けた教育によっても大きな影響を被る。幼少期は家庭言語が一番影響力の強い言語であっても、成長とともに教育を受けた言語の方が、運用能力が高くなることもあるのである。また、言葉は状況に応じて使い分けるべき単なる道具にとどまるものではなく、その人の心のあり方とも深く関係するものである。マルチリンガルの人々はどの言語を誰に向けて使用するかで、自分自身のアイデンティティを、言語を通して主張しているということもできるのである。

母語の役割を多角的に見るために、フィンランドのスクットナムⅡカンガスという学者は、母語を、①習得した順番、②最もよくできる言語、③最も（エ）ひんばんに使う言語、④内的アイデンティティ、⑤外的アイデンティティ、という複数の観点から定義することを提唱した。

具体的に考えてみよう。もしあなたが日本人の親を持ち生まれてからずっと日本で暮らし、日本の学校に行っているとする、ふつう①から⑤までが全て「日本語」であることになるだろう。だが、もし日本人の親の元に生まれたとしても、子どもの頃米国やオーストラリアなど英語圏の国に移住し現地の学校に通学しながら育ったらどうだろう。カズオ・イシグロという作家をご存知だろうか。ノーベル文学賞を受賞した英国の作家である。彼は日本人の両親の元に長崎県に生まれ、幼少期に英国に渡った。日本生まれで幼少期を日本で過ごしたのだから、最初に覚えた言葉①は、日本語であろう。しかし、最もよくできる言葉②、もっともひんぱんに使う言葉③はおそらく英語だろう。④の内的アイデンティティとより強くかわる言語は本人に聞かなければ確実なことはわからないが、作品の内容から判断しておそらく日本語ではなく英語ではないだろうか。⑤の外的アイデンティティについて考えると、他者によって付与されるアイデンティティであるから、彼の生い立ちや名前、(5)風貌によって、日本語ができることを期待されたことがあっただろうと想像される。カズオ・イシグロにとって、①と⑤は日本語、それ以外の②③④は英語となると推測できるのである。では、彼にとって日本語はフランス語やドイツ語と同じような外国語の一つに過ぎないのだろうか。たとえあまり使わなくなったとしても、幼少期や渡英後の数年間、英語を習得して英語の方が日本語よりも強い言語となるまでの間、彼の認知の土台となったのは日本語に違いないし、家族との絆、ルーツにつながる言語であるため、日本語に対して他の外国語とは異なる思いを抱いていると考えるのが自然であろう。この例からわかるように、多言語を使って生活する人々の言語の力は、時間の経過や環境により変化し、個人のアイデンティティの形成と深く結びついたものであると言える。

ろうの人々に話を戻そう。「日本手話」は、日本に住むろうの人々の間で自然に生まれた自然言語で、日本に住むろうの人々の母語であると言える。手話にはもう一つ、音声日本語に合わせて手話を当てた「日本語対応手話」と言われるものがあるが、ろうの人々にとっては全く別の言語である。世界には、その国のろうの人々の間で使用される四百以上の手話があり、独自の文法構造をもち、音声言語とは異なる言語である。世界中の手話は、単なる身振りではなく、言語学的にも音声言語と対等な「言語」の一つとみなされており、これを公用語と認めて

いる国も多い。しかし、日本は障害者基本法において手話を言語として認めている（内閣府二〇一三）ものの、これを公用語として定める具体的法律はまだない。ろうの「母語」は一体何であろうか。デフファミリーに生まれた場合、①最初に習得した言語は、手話となるが、デフファミリーに生まれたのではない場合は、手話ではないだろう。②最もよく使うことのできる言語は、ろう者の場合、手話であると考えられるが、そのためには多くの条件が整えられる必要がある。③よく話す言語が何であるかは、学校や生活環境によって違ってくるだろう。ただ、アイデンティティの獲得に密接にかかわるという点では、④内的にも、⑤外的にも、それは手話であるはずだ。

では、ろうの人々は、どのように母語を獲得するのだろうか。聴こえる子どもの場合、（二）ケアをしてくれる人の言葉が母語となる。日本語母語話者に育てられた子どもの最初に接する言葉は日本語であるから、通常は日本語が母語となる。それに対し、デフファミリーでは、手話が家族の言語として使われているので、子どもは生まれた時から「日本手話」に接しながら育つ。聴こえる家族と違って、母子の関係や家族の会話は全て手話で行われる。乳児は、最初は見ているだけであっても、次第に手話で話せるようになる。近年の研究では人間の脳は3歳までに80%が発達するため幼児教育の大切さに注目が集まっている。文化の習得も幼児期が肝要で、5歳までに母文化を習得すると言われている。脳の発達を支えるのは視覚や聴覚はもちろんであるが、言語の役割もいかに大きいか想像に難くない。虐待などによって認知的な発達が遅れ、言葉の習得も遅れるケースがあるが、それは幼児期の環境が脳の発達にどれほど大きな意味を持つかを物語るものであると言えよう。

（え）、聴こえる親を持つろうの子どもたちの場合、彼らの親とのコミュニケーションはどうなっているのだろうか。手話はろう者との接触で覚えるとなると、ろう学校に入るまで手話に接することはできないことになる。親はいかにして母子の関係を築き、子どもたちの認知的発達を支えるのかは大変重要な課題である。聴こえる親も手話を習って子どもにコミュニケーションをとることが理想であるが、保護者への支援が行き届いてないのが現状だ。

「しゅわまる」というグループがある。神奈川県聴覚障がい児等手話言語獲得支援事業で、「きこえない・きこえにくい子どもが手話を獲得するための場」として二〇二〇年に誕生した。月に一回の対面での教室と、月に一回映像を配信して、手話での子育てを支援している。具体的には、聴こえのよくない子どもとどう触れ合うか、手話を交えたコミュニケーションやアクティビティの方法などを実際に子どもとの活動を通して学ぶ場となっている。子どもの聴こえが悪くても親にできることはあり、日々の生活の中で子どもの成長を支えていく方法をろうの人々が中心になって、聴親に教えてくれる。さらに、(三)「しゅわまる」のような事業は、コミュニケーション方法について保護者をサポートするという役割を担うだけではなく、ろう文化との接触の意義を知らしめるという大切な役割を果たしているとも言える。

さて、学齢期のろうの子どもはどのような教育を受けるのだろうか。まず、ろう教育が進んでいるヨーロッパでの教育を見てみよう。ヨーロッパなどでは、口話法は19世紀末に導入されており、それが世界中で長らくろう教育の教育方法として主流となっていた。学校では手話は禁じられ、唇の動きを読み、音声言語の調音の習得を目標とする。しかし、口話法は習得に多大な時間と労力、厳しい訓練が必要であるにもかかわらず、到達レベルとして年齢相応のものに達する人は少数であることがわかってきた。欧州の研究では、書記言語の読解力の到達レベルが最終的に小学校4年生レベルであるという報告が出された。小学校4年での学業のつまずきは、「9歳の壁」という言葉で表されることが多い。これは、小学校4年生くらいで成績が伸び悩む子どもたちが聴こえの度合いに関係なく存在することを意味する。この時期を境に学力に秀でた子どもとそうでない子どもの差が大きくなることを指す。なぜその時期を境に学力に差が出るかというと、小学校低学年までの学習に比べ、それ以降は内容が複雑で難しくなるからである。小学校の低学年は読み書きの基礎を作る時期であるが、4年生くらいからより高度な教科内容となっていく。(お)、語彙や概念の抽象度が高くなっていくと言われている。ろう・難聴の子ども読解力を伸ばすには、彼らが完全に理解することができると母語⇔手話による教育の方が有効であるという結論が導かれた。その結果、欧米では90年代より「手話」を学校言語に用いた教育がなされてきた。手話で書記言語を学ぶことを「バイリンガルろう教育」という。

一方、日本における戦後のろう教育は、唇の動きを読む（読話）「純粹口話法」の時代から、補聴器や人工内耳を使用して残存聴力を活用した「聴覚口話法」へと発展してきた。そして聴覚だけではなく使える手段はなんでも使って言語を教える「トータルコミュニケーション」という考え方から、日本語を手指で表現した「日本語対応手話」が誕生し、公立ろう学校の教育方法の主流となっている。しかし、ろう学校内部でも口話法が万能ではないと考える人々もいて、公立ろう学校でも「手話」が併用されるようになり、二〇〇九年には文部科学省が学習指導要領を改訂して、ろう学校で「手話」をコミュニケーション手段として使用することを認めた。手話禁止から70年を経てのことだとう。

生徒たちは、生徒同士の会話では「日本手話」でコミュニケーションをとる。「日本手話」はろうとの接触なしには習得できないため、ろうの親を持つ（デフファミリー）の子どもでない限り、学校に入ってから習得することが多い。欧米では90年代からバイリンガルろう教育が主流となる中、日本ではバイリンガルろう教育という、「手話」と「書記日本語」の習得を目指す教育方法への（オ）てんかんはなされなかった。二〇〇八年に設立された私立明晴学園が、日本で唯一のバイリンガルろう教育を行う学校で、「第一言語（母語）としての日本手話、第二言語としての書記日本語を身につけ、日本手話と書記日本語を使用するバイリンガルとして育成する」「ろう者としてのアイデンティティ（自己肯定感）を育成するとともに、聴文化の理解と尊重する態度を身につける」ことを目指している。幼稚園、小学部、中学部からなり、日本手話を用いた教育を行なっている。

筆者も実際に明晴学園を訪問する機会を得た。校内に入ったときの印象は、普通の学校となんら変わるものではなかった。至る所に校内ルールやプロジェクトなどが日本語で書いて貼ってあった。英語や国語の時間も、手話による説明や発表、ディスカッションが行われ、板書では日本語や英語が使われる。なんといっても子どもたちの表情が生き生きとして活発に手をあげて発言しているのが印象的だった。普通の学校との違いは、子どもたちが前を向いて座るのではなく、お互いの手話による発表が見えるように輪になって座っていること、静かなこと、

ドアがないことだろうか。机をずらしたり、落としたものを拾ったりする物音は聴こえるが、子どもたちの声は全く聴こえないのである。明晴学園では、認知的な発達だけでなく、ろう文化の教育、ろう者としてのアイデンティティがしっかりと育っていることを、授業中や休み時間の様子から感じたものだ。

一九九五年に木村晴美・市田泰弘によって、「ろう文化宣言」という論文が世にでて、初めて「ろう」にはろうの価値観や考え方、行動パターンというものがあるという事実が宣言された。社会には、さまざまなマイノリティグループが存在する。身体的な特徴に加え、言語や国籍、出身地、職業、世代、性などにより文化的多様性を認め合えるような社会を目指すのが多文化共生の方向であろう。「ろう文化宣言」から四半世紀が過ぎ、世の中の常識はかなり変化しようと思うが、「ろう・難聴」の人々の文化に対する理解はまだまだなのではないだろうか。

今日、教育の現場では、障がいがあるという理由によって排除されることなく、障がいを持つ者も通常学級の構成員として包み、支えようというインクルーシブの立場が推進されている。手話による教育を行おうとする明晴学園の教育方針は、こうしたインクルーシブの流れに逆行しているようにも見えるかもしれない。しかし、(一)聴者の世界とろうの世界をつないでいくことは望ましいことであるが、その際どうしてもマイノリティ側のろうをマジョリティである「健聴者」の方へと近づけようとする発想になりがちであり、そこに大きな問題があるように思う。

近年は人工内耳の急速な発達を受けて、早期の人工内耳装着の手術が進められ、通常学級での教育を推進しようとする動きもある。医療の発展自体に反対するつもりはないが、聴こえの度合いは個人差も大きく、人工内耳による効果も一律に論じることとはできないと言われている。また、手話の使用が音声言語の習得の妨げになると主張するグループも現れてきている。こうした時代の趨勢の背景には、手話が一つの独立した言語であり、ろう文化には固有の存在意義があるという理解が十分に行き渡っていないという事情があるように思われる。指摘した時代

の趨勢は世界的なもので、すでにヨーロッパではろう学校が閉鎖されつつあり、教育現場はインクルーシブ教育の方向へと急速に舵が切られつつある。インクルーシブ教育自体を否定するものではないが、ろうの人々の言語や文化が損なわれることのないよう細心の注意が払われることを願いたい。

(注1) 世界保健機関(WHO)によると、81デシベル以上の大きな音が聴こえない人を重度難聴者と定義する。「ろう」は、100デシベルが聴こえない、日常の音がほぼ聴こえない状態で、生まれつきそうした障がいを持った人を指す。

(注2) 聴覚に障がいがない人のことを「健聴者」と呼ぶこともあるが、この呼び方には、聴覚に障がいを持つ人を耳が異常な人と見なす差別意識をもたらしかねないところがある。そのため、本稿では、聴覚に障がいがない人のことを「聴こえる人」または「聴者」と表記する。

問一 傍線部(1)から(5)の読みをひらがなで書きなさい。(配点各一点)

問二 傍線部(ア)から(オ)を漢字に直しなさい。(配点各二点)

問三 傍線部(あ)から(お)の空欄に入る語として適切なものを次の中から選び、その記号を記しなさい。なお、同じ語が二度用いられることはないものとする。(配点各一点)

- A では
- B 一方
- C ところで
- D そして
- E しかし

問四 傍線部(一) そのような多言語社会に暮らす人々にとって、言語能力は年齢や生活とともに変化し、受けた教育によっても大きな影響を被る、の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号を記しなさい。(配点五点)

- A 大学時代に学んだ外国語は、長い間使わなくても、忘れないものである。
- B 母語と言語の系統が近い言語は忘れにくい、系統の異なった言語は忘れやすい。
- C 外国に移住した子どもは、滞在年数が長くなると、母語を保持することは難しい。
- D 多言語社会で暮らす人は、複数の言語を習得する能力を有している。

E 外国に住んでその国の言葉を習得しても、大人ならば決して母語を忘れないものだ。

問五 傍線部(三) ケアをしてくれる人の言葉が母語となる について、筆者の意見とは異なるものを次の中から一つ選び、その記号を記しなさい。(配点五点)

A 虐待を受け、人との親密な接触に乏しい子どもは母語の発達においても支障が出る。

B 手話は、ろうの親から生まれた子ども、つまりコーダの母語にはなり得ない。

C 全員がろうの家族、つまりデフファミリーの子どもの母語は、手話である。

D 言語を習得する時期に育ててくれた人の言葉は何語であつても習得できる。

E 聴こえる親に育てられたろうの子どもの母語は手話ではない。

問六 傍線部(三) 「しゅわまる」のような事業は、コミュニケーション方法について保護者をサポートするという役割を担うだけでなく、ろう文化との接触の意義を知らしめるといふ大切な役割を果たしているとも言える、という主張の理由について、筆者の意見として最も適切なものを次の中から一つ選び、その記号を記しなさい。(配点五点)

- A ろうの大人が保護者に対して日本語対応手話を教えてくれるから。
- B ろう学校に入学する以前の子どもには認知的な発達に対するサポートは必要ないから。
- C ろうの9割は聴こえる親の元に生まれるため、口話を習得すべきだから。
- D 手話やろう文化について親が理解することが子育てに役立つから。
- E 聴こえる家族の文化をきちんと教えるために手話を習得すべきだから。

問七 筆者は、ろう・難聴者にとっての「バイリンガルろう教育」をどのようなものと見なしているか。筆者の見解を六〇〇～七〇〇字で要約しなさい。(配点五点)

問八 傍線部(下) 聴者の世界とろうの世界をつないでいくことは望ましいことであるが、その際どうしてもマイノリティ側のろうをマジヨリティである「健聴者」の方へと近づけようとする発想になりがちであり、そこに大きな問題があるように思う、という文について、まず(1)筆者の主張の意味を六〇〇～七〇〇字で説明した上で、次に(2)筆者の意見に対するあなたの考えを、理由を挙げ、一〇〇〇～一二〇〇字で述べなさい。(配点十五点)